ドイツにおけるナポレオン3世のカリカチュア
—『クラデラダッチュ』紙(1851－1871)を中心に —

小　谷　民　菜

はじめに

今年はオノレ・ドーミエ（1808－1879）の生誕200周年ということで、フランスでは大規模なドーミエ展が行われた。[1] 共和主義者の彼は有名な風刺新聞『カリカチュール』や『シャリヴァリ』を中心に約4,000点の風刺画すなわちカリカチュアを発表したが、その活動は検閲との不断の戦いであった。

フランスでは七月革命で、1830年に「検閲は二度と導入されてはならない」という強化条項が憲章第7条に付け加えられたにもかかわらず、実際には印税や高額の保証金が徴収され、反対派の新聞は、頻繁な差し押さえや、禁固刑、罰金の憂き目に会った。[2] そして5年後には国王暗殺未遂事件をきっかけに、9月9日、悪評高い「九月法」が可決され、事実上、体制に敵対的な政治風刺画の発表は不可能になった。[3] 国民の識字率が低かった19世紀ヨーロッパでは、政治紙の文字テキストによる記事などよりも、目で見て誰にでも理解でき、その印象がはっきりと記憶される図像表現、カリカチュアの類に対して為政者ははるかに厳しかった。

1848年の革命で、束の間ではあったがフランスでは「九月法」が廃棄され、ドイツ、オーストリア、イタリアでも政府の軍事体制復古がぐらつき、検閲が一時的にせよ中断した。ドイツではベルリンだけで短期間の内に絵入り風刺新聞が35紙も発行され、間もなく日に150種もの機関紙が出た。[4] しかしフランスではルイ＝ナポレオンによる1851年12月のクーデターが起こり、彼はクーデター10週間後の1852年2月17日、法令を公布して「九月法」をうまく引き継いで政治風刺画を効果的に禁止した。この法令の「極端に厳しい行政上の実践の結果、一八五二年から一八六七年までのフランスにおける批判的政治風刺画はほとんど空白状態であった。」[5]

ドイツにおいても革命はじきに後退して、多数の風刺雑誌が消えた。[6] その中で生き残った数少ない風刺新聞が『クラデラダッチュ*Kladderadatsch*』である。『クラデラダッチュ』は一応自由主義の立場を取り、「中道」を奉じて1944年まで続いた。ドイツ国内政治の批判を大幅に避け、途中からビスマルク支持に転じ、外交問題などを

巧みに扱って切り抜けたのである。そして、「1851年12月のクーデターから1870年9月の失墜にいたるまで」、[7] 大まかに言えば、第二帝政の間、間断なく仮借なしにナポレオン3世を嘲弄した。ドーミエらフランスの風刺画家たちが描けなかった独裁者の像を、以下『クラデラダッチェ』を中心に年代順に追っていく。

1　クーデターから皇帝になるまで

Ach! wenn Du wärst mein eigen!

Ach! wenn Du wärst mein eigen!
Wie lieb sollt'st Du mir sein!
Wie wollte ich Euch zeigen —
Ihr Wühler groß und klein!
Wie schmiß ich fort den schwarzen Claque!
Trotz Changarnier, Thiers, Cavaignac.
Wenn Du erst bist mein eigen:
Dann schlag' der Teufel drein!

Ach! wenn Du wärst mein eigen!
Du goldne, süße Last —
Ich wollt' gewiß verschweigen
Wie Du gepumpt mir hast —
Daß die Armee Champagner soff: —
Durch Dich Mathilde Demidoff!
Ach! wenn Du wärst mein eigen!
Ich wollt' verschwiegen sein!

Verantwortlicher Redakteur: E. Dohm. — Verlag von A. Hofmann & Comp. in Berlin, Hausvoigteiplatz 3. — Druck von J. Draeger in Berlin, Adlerstr. 9

図版1）1851年12月7日付『クラデラダッチュ』第49号

タイトル）
ああ！お前が私のものであったら！
キャプション）
ああ！お前が私のものであったら！
どれほどお前は私にとっていとしいものであることか！
どれほど私はお前たちに示そうとしたことか　—
お前たち大小のライバルよ！
どれほど私はあの陰険なクラックを鞭で打ち続けるだろう！
シャンガルニエ、ティエール、カヴェニャックにも負けず。
ようやくお前が私のものになった暁には
悪魔が飛び込んでくるがよい！

ああ！お前が私のものであったら！
黄金の、甘美な重荷であるお前よ　—
私は必ずや口外はしない
どれほどお前に前借りしたかを　—
軍隊がシャンペンをがぶ飲みしたこと　—

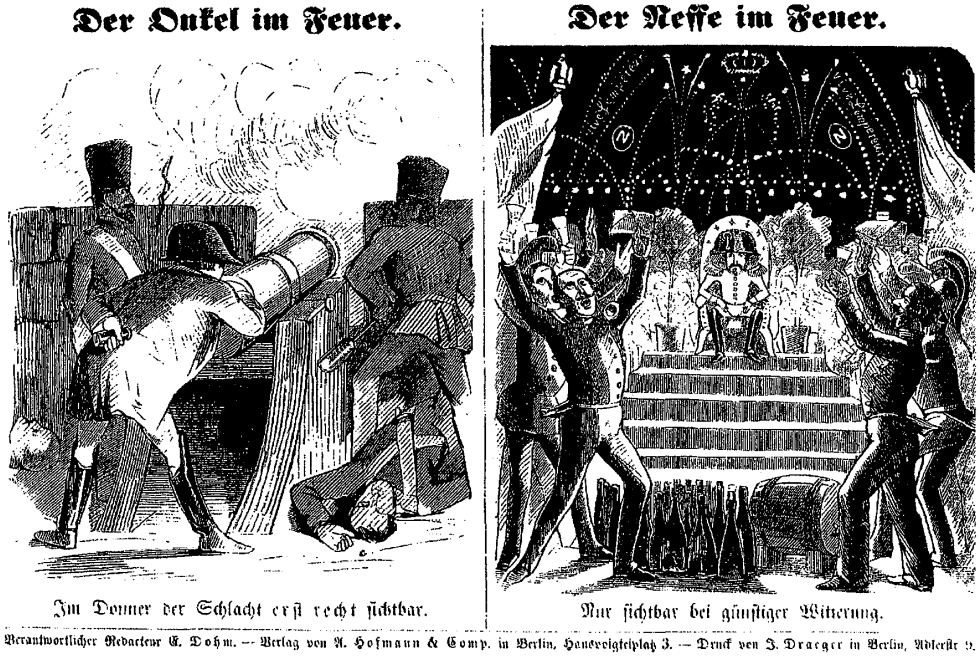
お前を通じてマティルド・デミドフを！
ああ！お前が私のものであったら！
私は口をつぐんでいよう！

解説）

1851年12月２日、クーデターを行ったものの、まだフランス共和国の大統領でしかないので、ルイ＝ナポレオンは早くも皇帝の冠を夢見ている。一年後ようやく彼は皇帝になる。

シャンガルニエ将軍、政治家ティエール、カヴェニャック将軍はいずれも強力な政敵であったが、クラック(Clacque)については不明。また、マティルド・デミドフは、もともとマティルド・ナポレオンといって、ルイ＝ナポレオンの従妹であり婚約者であった。しかし1836年に彼がストラスブール蜂起を起こしたために破談になった経緯がある。マティルドは政略結婚でロシアの大富豪デミドフ公に嫁いだが、別居状態になり、パリに来ていた。[8)]

ナポレオン・ボナパルトの甥であり、フランス共和国の大統領となったルイ＝ナポレオンは国際的に注目を集めていたはずとはいえ、国内の政治家達や従妹のこと、ひいては皇帝になろうとする野望まで、ドイツでもお見通しだったわけである。当時として、クーデターから５日目でこの反応は早いのではなかろうか。また彼の相貌、大きな鼻と立派な髭、そして少し厚ぼったい目蓋が大胆に描かれている。



図版２）1852年５月16日付『クラデラダッチュ』第20号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
砲火の中の伯父。花火の中の甥。
キャプション）
戦闘の轟音の中でようやく見られる。好天気のときのみ見られる。

解説）
砲火の中の伯父：「大」ナポレオンは砲兵（最初から彼の兵科）で戦闘指揮者だった。危険のど真ん中にいた。
花火の中の甥：「小」ナポレオン（ヴィクトル・ユゴーがそう呼んだ）は、拍手喝采の花火の中で玉座（もっとも、まだ皇帝にはなっていないが）にちょこなんと座っている。前面では気前よくシャンパンで乾杯が行われている。こういう機会が軍隊における「好天気」と呼ばれたようだ。6ヵ月半後にこの甥はナポレオン3世になっているから、この絵には予言的効果がある。それにしても伯父との落差は大きい。
『クラデラダッチュ』のこの号は、反フランス的傾向のために警察当局によって押収された。[9)]

2　独仏国境をめぐる問題とドイツの統一問題

図版3）1853年1月20日付『クラデラダッチュ』第5号
（ヴィルヘルム・ショルツとH. リンク、木版）

タイトル）

ル・マソンの『フランスの国境』について

キャプション）

あのブドウは酸っぱい！

解説）

作家アルベール・ル・マソンは、1852年に出てただちに翻訳された彼の書『フランスの国境』によって大きなセンセーションを惹き起こした。その本の中ではフランスの自然な国境として、ライン河線が死活に関わる重要なものとみなされている。

この絵では父なるラインがたくましい手足を伸ばしている。背後右に一人のブドウ栽培兼ワイン製造者とプロイセンの一兵士とコサック兵の姿が見え、彼らは兄弟の杯を交わしている。前面左にはナポレオン3世が平和のシュロの葉を持った狡猾なキツネとして描かれている。シュロの葉には彼のいかがわしいスローガン「帝政とは平和なり」が読み取れる。ル・マソンの本はキツネの隣に置かれている。

キャプションとして『クラデラダッチュ』紙はイソップの『寓話』から有名な引用句を使っている。フランスの激しい併合欲には見込みがないと言いたいわけだ。悪魔が座っているパリの証券取引所（後ろ左）では株式が暴落したらしく人々が騒いでいる。ル・マソンにも『クラデラダッチュ』紙にも同様に、ライン左岸がフランスに帰属していた1794年から1814年にかけての時代の記憶が鮮明に残っているのである。

それと1840年にフランスがライン河以西を併合しようとしていると誤解されて、ドイツの世論に抗議の声を鳴り響かせたときの記憶もあるとコッホは指摘する。[10] それらの抗議は次のベッカー作の歌にこだましている。「あなた方は自由なドイツのライン河を所有してはならない！」

図版4）1859年10月9日付『クラデラダッチュ』第47号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

さあいつでも元気よく！

キャプション）

最上段左：古い連邦の情勢では今やもうやっていけない。

最上段右：今や我々はオーストリアを信じてすがるべきだろうか。

中断左：あるいは我々は完全にオーストリアをドイツから締め出すべきか。

中断右：バイエルン総理大臣のプフォルテンの三極理念の中に我々の安寧を求めるべきだろうか。

下段左：あるいはドイツは丸ごとプロイセンに吸収されるべきだろうか。

下段右：いずれにせよ我々は、起こるべき事柄について早急に**一致**しなければならない。**さもないと**（指差しマークが五個）

解説）

ドイツ連邦の内部でプロイセン＝オーストリアの対立がますます先鋭化している一方で、その間の国々は「第三のドイツ」を形成しようと思い至った。この三極理念はバイエルンの総理大臣ルートヴィヒ・フォン・デア・プフォルテンによって説かれた。『クラデラダッチュ』の画家ショルツは、三つの激しく議論の戦わされている将来の可能性を描き出している。

1．オーストリアがプロイセンの抵抗にも拘らず、統一されるべきドイツに押し入ってくる。
2．巨人のように膨れ上がった総理大臣フォン・プフォルテンの姿で表されたバイエルンが、二つの超大国を小人のような形成物に制限する。（オーストリアはその軍帽で、プロイセンは尖頂つきヘルメットでそれと分かる）
3．ドイツは丸ごとプロイセンに吸収される。これはフリードリヒ・ヴィルヘルム4世の言葉、「プロイセンは今後ドイツに吸収される（1848年3月21日）」の裏返しである。[11]

たとえどうなろうと、早急に解決策について「**一致**」しなければ、ナポレオン3世が偽りのオリーブの枝[平和の象徴]を手に持って、当事者すべてを彼の袋の中に詰め込むべくやってくる。これは『クラデラダッチュ』紙によって多数のヴァリエーションを取ってなされた警告である。

3　ナポレオン3世とビスマルクの初期の関係

図版5）1862年6月29日付『クラデラダッチュ』第29/30号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

ゲーテのファウストからの活人画（パリにて演出）

キャプション）

メフィストーフェレス：お前はまだ、悪魔を捕まえておけるほどの男じゃない！
甘美な夢の形象でこの男の周りを飛び交い、
幻想の海へ沈めてやれ！（『ファウスト第1部』書斎の場、
1509〜1511行）

解説）

1862年5月から9月までプロイセン公使ビスマルクはパリにおり、ナポレオン3世と最上の関係にあった。パリの信望ある有名な「ジュルナル・デ・デバ」紙がその折、美化した伝記を書いて彼におもねった（画面左下の翼を生やした女性）。ベルリンの政界ではすでに次のような噂が広まっていた。すなわち、パリ公使のポストはビスマルクが総理大臣の椅子によじ登る手前の最後の段階だというものである。[12)]

『クラデラダッチュ』紙は、ビスマルクをファウストとして描き、メフィストに描かれたナポレオン3世に眠り込まされている様子を示した。パリのバレリーナの姿をした妖精たちがビスマルクの周りを飛び交っているが、それらと共に「甘美な夢の形象」として、外交上の幻想のヴィジョン、たとえば仇敵オーストリアに対抗し、同盟国としてフランスとロシアと同盟条約を結ぶという「幻想」などが描かれている。天使の輪のようなものがあり、「フランス、ロシアとの同盟」と書かれている。またバレリーナの一人は、「ロシア、プロイセン、フランス」と書き込まれた地球儀のようなものを持っている。

夢の中ではビスマルクに敬意を表して全外交官が帽子を取っているが（上部左）、彼は早々と自分が記念碑になったつもりでいる（上部右）。[13)] 右下にはドイツ連邦議会におけるプロイセン公使としての彼の経歴（1851年〜1859年）の回想を前にして、弁髪（時代遅れの存在のシンボル）をつけたしゃれこうべが描かれている。

パリではメフィスト＝ナポレオン3世がファウスト＝ビスマルクに悪魔的な力を及ぼしているように見えるが、『クラデラダッチュ』紙はフランスの不安とプロイセンの潜在的力を認識しているとも解釈できる。ゲーテの『ファウスト』では、このあとファウストがメフィストと堂々と渡り合い、最後には勝利を収めるからである。

Ein Jünger der Staatskunst verabschiedet sich von seinem Meister, um selbstständig das Geschäft zu betreiben.

図版６）1862年10月19日付『クラデラダッチュ』第48号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
教師と生徒。
キャプション）
経国策の弟子がその師匠に暇を告げる、自力で本業をやりくりするべく。
吹き出しのせりふ）
朕において何ほどかを学べることを示して見せよ！

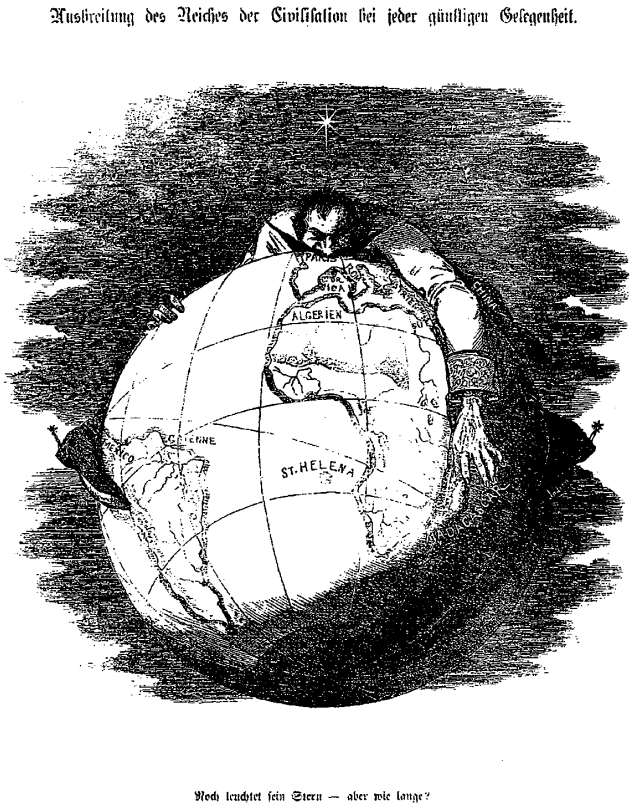
解説）

プロイセンの新しい総理大臣オットー・フォン・ビスマルクは、その前はパリ公使であった。その彼がフランスの首都に別れの謁見にやって来た。ナポレオン３世は鷲が天辺に付いた玉座から立ち上がる。その玉座の銘文は彼のクーデターの日付（1851年12月２日）を暗示している。

ビスマルクは当時ヨーロッパの世論において「フランス皇帝の弟子」とみなされていた。『クラデラダッチュ』紙は、ビスマルクがこれから彼の立場でベルリンで議会と憲法に対して抜き打ち的な力の行使[クーデター]を遂行するかもしれない蓋然性を指摘しているわけである。というのも彼は「かの人のもとで何ほどかを学んだ」のだから。

ドイツでナポレオン３世は「かの人Lui, Er」と呼ばれるのが通例だった。

4　ルイ・ナポレオンの拡張政策とドイツ統一への警戒



図版7）1863年8月8日付『小さな保守主義者』第32号（作者不明）

タイトル）

好機の度に文明の帝国は拡張する

キャプション）

彼の星はまだ輝いている　―　でもどれだけ長く？

解説）

自由主義の風刺新聞だけでなく、保守的な滑稽新聞もまた、当時権力の頂点にあったナポレオン3世のカリカチュアを出している。いつも主題は同じ、すなわち、かつてセント・ヘレナに流されたナポレオン1世の甥に対する警告である。甥は、伯父ナポレオンと全く同じく世界帝国を夢見ている。地球の上に書き込まれているのは、

1．メキシコ遠征（1862年から1866年まで）、最初は成功を収めたが、その後破滅。
2．囚人コロニー、カイエンヌの創設（1852年、1945年まで機能していた。最初は論敵用に定められていたが、後には犯罪者全般用になる）。
3．フランスの植民地帝国の拡充：東アジアにおいて（中国に従属しているインドシナ、1856年から1860年まで）、マダガスカルにおいて（1860年代以降の征服の試み）、そしてとりわけアルジェリアにおいて。既に1830年に始まっていたアルジェリアの降伏はナポレオン3世治下で完了した。

4．シリアへの介入は、1860年にダマスカスのキリスト教徒大虐殺の後に行われた。
5．インドにおいてフランスは依然として五つの貿易港しか所有していなかった。
6．ローマにナポレオン３世は1861年から1870年まで教皇のための守備隊を維持していた。[14]

地球にしがみつくこのナポレオン３世の姿は貪欲で獰猛で、『クラデラダッチュ』のショルツの描き方に比べて、はるかに攻撃的である。

図版８）1863年９月13日付『クラデラダッチュ』第42号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
熱く煮て、さめてから食べる（物事は短兵急には行われぬ）。
キャプション）
左：フランクフルトにおける君侯会議の開始。ドイツの一致―フランスにとっての脅威！（モニトゥール紙）
右：フランクフルトにおける君侯会議の終結。すべて元のまま―ドイツ連邦議会―平和！（モニトゥール紙）

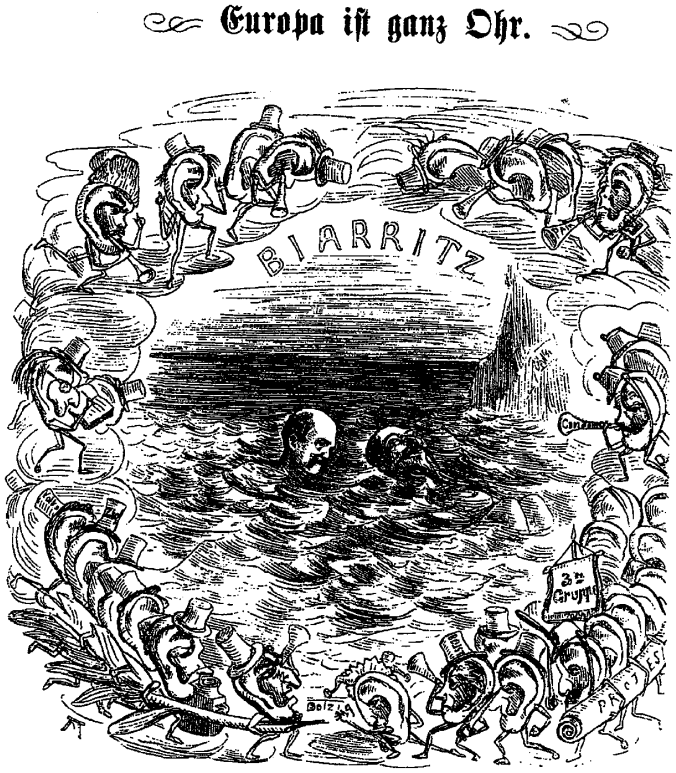
解説）
（1863年８月17日から９月１日まで開催の）フランクフルト君侯会議において、フランツ・ヨーゼフによって提案されたドイツ連邦の新秩序（ドイツの一致）は、フランスの国境のすぐそばに威嚇的な7,000万人の国家を成立させかねないものだった。

『クラデラダッチュ』紙はパリの政府機関紙『モニトゥール』を引用し、軍の最高位を占めるフランスの元帥パトリス・ド・マク・マオン（後ろ左）と、財務大臣アシ

ル・フールト（後ろ右、手に証券相場票）の警戒心そのものの表情を描いている。前面ではナポレオン3世が既に刀を抜きつつある。

オーストリアのプロジェクトがプロイセンの拒絶によって挫折したあとでは（右側の絵）、フランス皇帝と高官たちの顔の表情からは安堵が見てとれる。

5　ナポレオン3世とビスマルクの応酬



図版9）1865年10月14日付『シュトゥルムブラット』第159号（作者不明、木版）

タイトル）

ヨーロッパが全身耳となる

キャプション）

—　この水浴はお体にいいですか、陛下？　—　ありがとう、結構よいぞ！

解説）

ビアリッツへのビスマルクの「保養旅行」（1865年10月）は、その地で夏の居城に滞在していたナポレオン3世との会談によってクライマックスを迎えた。会談の内容について全新聞が憶測をめぐらしたが、何らかの協定が結ばれたわけでもなかった。

『シュトゥルムブラット』紙は当時の新聞のイラストの中で頻繁に描かれた皇帝と

ビスマルクの散歩の場面を、たわいもない言葉が交わされている、二人一緒の水浴場面に変えている。

右下には、大群をなして、立ち聞きする耳の姿をした「第3のグループ」のメンバーが登場している。このグループは、ザクセンの総理大臣フリードリヒ・フェルディナント・フォン・ボイスト伯爵を長として、ドイツにおいて、プロイセンとオーストリアとの間の「第3の強国」を打ち建てようとしていた。[15]

無遠慮に立ち聞きしているものたちの中では、右中央にオーストリアの参謀本部（三つの将校帽を被った頭）を認めることができる。同参謀本部は、当時疑問視されていた「共同統治」、すなわちシュレースヴィヒ＝ホルシュタインにおけるプロイセンとオーストリアの共同管理について、いくばくかの事を聞き知ろうとしている。

ER. Nun, so nehmen Sie die Austern allein, und geben Sie mir dafür den Wein!
Der Andere. Bitte tausendmal um Entschuldigung; aber der gehört ja gerade zu den Austern.

図版10）1865年10月22日付『クラデラダッチュ』第49号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

ビアリッツにおける外交的朝食

キャプション）

かの人：よろしい、それでは牡蠣を独り占めして、その代わり朕にはワインを下され！
もう一人：どうか幾重にもお許し願います。ワインはそれこそ牡蠣には欠かせないものです。

解説）

『クラデラダッチュ』紙はビアリッツのテーブルについているナポレオン3世とビスマルクを描いている。背後を皇妃ウージェニーが散歩している。

皇帝はホルシュタインの牡蠣を断念したが、その代わりにラインのワイン、すなわちライン左岸を要求する。ところがビスマルクはホルシュタインもライン左岸も欲している。というのも（ここでは言及されていないが）彼のモットーは「一度食べ始めれば食欲がわく」[少しでも手に入るともっと欲しくなるものだ]というものだったからだ。そして、いかなるプロイセンの権力拡張の際にもナポレオン3世は補償の要求をしていたのである。

またこのカリカチュアは、ビスマルクがパリの公使時代からの皇帝という「師匠」に対して、優位を増しつつあったことの一例でもあろう。

6　プロイセンの拡張に対するナポレオン3世の「チップ政策」

図版11）1866年8月18日付『ベルリン・パンチ』第33号（木版）

タイトル）

ヨーロッパの均衡

キャプション）

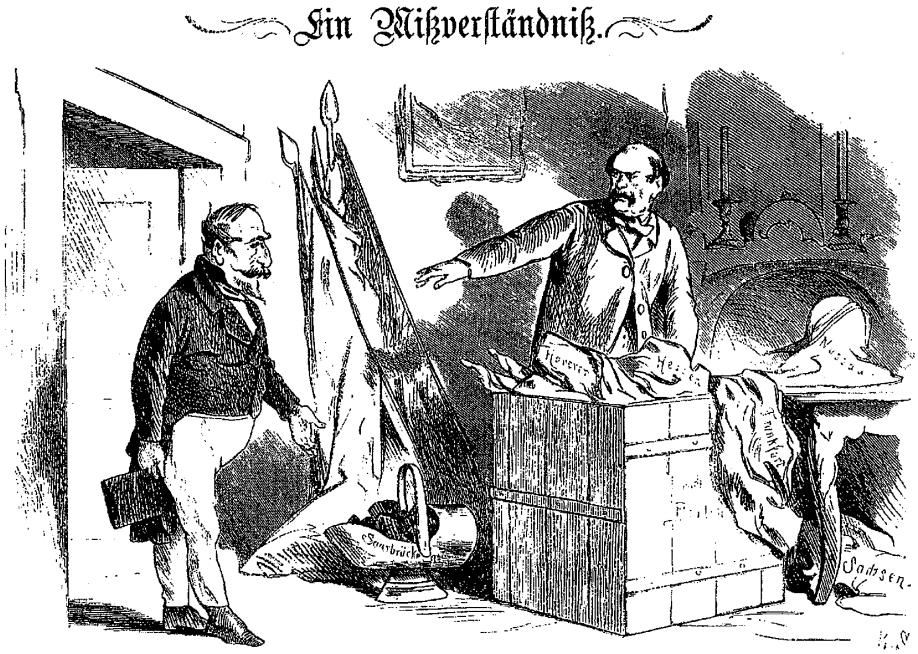
「陛下、ご満足下さい！　私はあなた様より多くの筋肉と多くの上背を有しております。その代わりあなた様は私よりも大きな太鼓腹と大きな鼻を持っておいでです！」

解説）

保守的な『ベルリン・パンチ』紙はたわいもない体重比べを描きつつ、その実自由主義的な『クラデラダッチュ』紙と意見を同じくしている。普墺戦争[16]におけるフラ

ンスの中立に対する「チップ」はないということだ。

自分の筋肉を誇示し尖頂つきヘルメットを被ったこのプロイセン人の姿はちなみに、この時代のフランスのカリカチュアにおいてステレオタイプになった。[17] ショルツの描くものと比べ、ここに描かれたナポレオン3世は太鼓腹がものすごく強調され、眼鏡をずり下ろし、品格がない。



— Ich wollte Ihnen nur zu der schönen Erbschaft gratuliren und sehen, ob nicht eine Kleinigkeit für mich — —
— Ach was! Hier wird nichts gegeben!

図版12）1866年8月26日付『クラデラダッチュ』第39号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

誤解

キャプション）

—（仏皇帝）朕はただそなたに、すばらしい遺産の祝いを述べたい、そして朕にわずかばかりのものでも残っていないか見たいだけじゃ— —

—（ビスマルク）冗談じゃない！ここには何も差し上げられるものはありませんよ！

解説）

オーストリアとの戦いに勝った後、プロイセンはビスマルクの併合政策により大きく拡張していた。ザクセンは北ドイツ連邦に加盟するよう強いられた。フランスの不干渉の見返りにナポレオン3世は代償を望んでいた。すなわち、ルクセンブルク、ザールラント、プファルツからマインツまでのライン左岸である。ビスマルクは手を伸ばして拒否している。

この無心をするフランス皇帝のカリカチュアはヨーロッパの世論における彼のイメージとも一致している。皇帝の「チップ政策」という言い方がなされた。

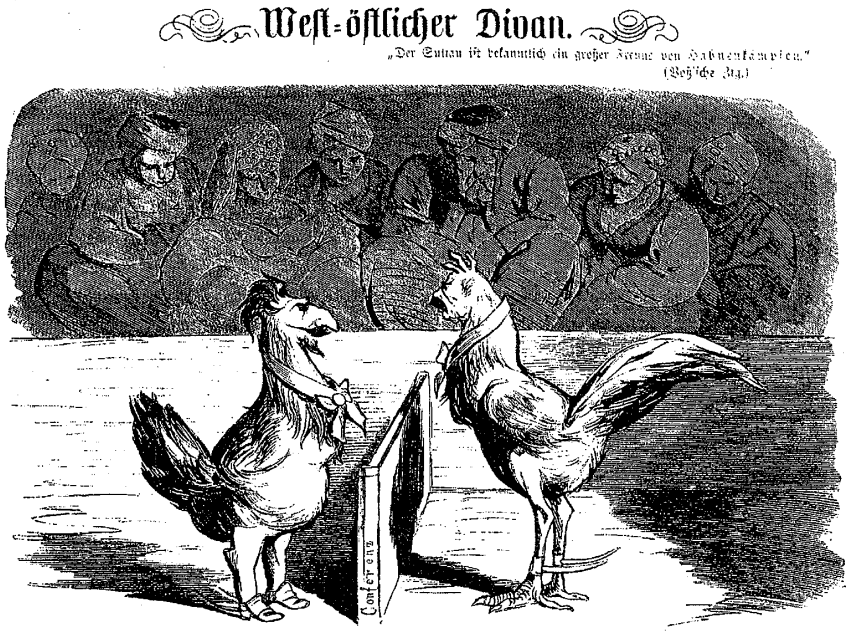
Ein guter Schäfer läßt kein Schaf verloren gehen.

図版13）1867年3月31日付『クラデラダッチュ』第14/15号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
ドイツの牧草地
キャプション） 良き羊飼いは一頭たりとも羊を奪われない。

解説）
大公国ルクセンブルクは元来ドイツ連邦のメンバーであったが、1866年に脱退して独立した。ナポレオン3世がこの公国をオランダから買い取ろうとしたために、プロイセンを始めとするドイツの諸領主がいきり立ち、ひいてはヨーロッパを戦争の縁にまで持っていった。[18)]

連邦宰相ビスマルクはドイツを象徴する女神ゲルマニアによって、彼は良き羊飼いとして、すべての羊たち、ルクセンブルクをもドイツの「群」に入れておかねばならないと呼びかけられている。右手には北ドイツ連邦の代表として何匹かの羊（ヴァイマルなど）がおり、奥にはプロイセンに無理に併合されたザクセンを表す羊がつながれている。中央にはプロイセンと同盟を結んだバーデンとバイエルンが牧羊犬の姿で、ライン河の向こうのナポレオン3世に吼えかかっている。ナポレオン3世は長靴を履いた狼として描かれていて、羊飼いであるビスマルクからルクセンブルクの羊を奪おうとしている。



Die Concurrenz zwischen den beiden Haupt-Hähnen ist bis auf Weiteres aufgeschoben (aufgehoben???).

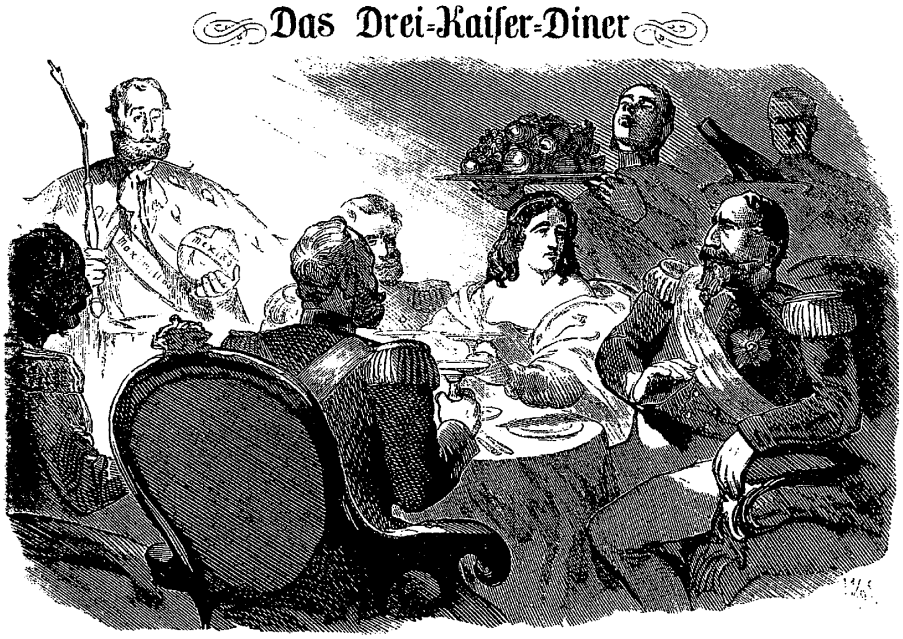
図版14）1867年5月12日付『クラデラダッチュ』第21号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
西東詩集
キャプション）
主役級の二羽のニワトリの間の会議は、当分の間延期されている（中止されている???）

解説）
『クラデラダッチュ』紙は、トルコ語の「ディーヴァンDivan」の持つ二重の意味、「詩集」（ゲーテの『西東詩集』）と「玉座の間」を利用している。背景にはサルタンと彼の廷臣たちが坐っているが、それはロンドンで招集された会議（5月8日～11日）の参加者たちを表している。二羽の闘鶏用ニワトリの間の争いはいずれそのうちに勃発するのだろうか。

1867年にはルクセンブルクを巡りフランスとプロイセンが対立し、ロンドン会議によりルクセンブルクは永世中立国として独立した。左のニワトリはナポレオン3世、右のニワトリはビスマルクを表している。この絵に見られるビスマルクの様式化された「3本の毛」に注意されたい。ちなみにキャプションについては、「延期は中止にあらずAufgeschoben ist nicht aufgehoben」という諺がある。

7　メキシコ皇帝の死とフランス・プロイセン間の険悪化



図版15）1867年6月23日付『クラデラダッチュ』第28号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

三皇帝の宴会あるいはテュイルリー宮殿に出たバンクォーの幽霊

解説）

『クラデラダッチュ』紙を代表する画家ショルツは、シェイクスピアの『マクベス』第3幕第4場を戯画化した。豪勢な食事の整えられた食卓の周りには、ナポレオン3世、ウージェニー皇妃、ヴィルヘルム1世王、ロシアのツァーであるアレクサンドル2世ならびに将来のアレクサンドル3世が座っている。ひとつの席だけが空いたままで、そこにメキシコのマクシミリアン皇帝の幽霊が折れた王笏を手にして現れる。

ナポレオン3世の指示に基づいて、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの弟が1864年にメキシコの帝冠を手にしていたのだが、彼は共和勢力の手に落ちて1867年6月19日に射殺された。折から急速に強大化していたプロイセンに気を取られ、在メキシコのフランス軍を撤退させ、結果としてマクシミリアンを見殺しにしたナポレオン3世は、フランス国民の信頼を大いに失い、この事件は彼の第二帝政が崩壊する遠因ともなった。

スコットランドを舞台にしたシェイクスピアの原作では、ダンカン王を弑逆して自ら王になったマクベスが饗宴を催している最中に、彼が刺客を使って暗殺したバンクォー将軍の幽霊が現れて、マクベスが取り乱す。

図版16）1869年6月20日付『クラデラダッチュ』第28号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
黒い幽霊
キャプション）
こちら側とあちら側
諸国民を「戦争に忠実」にし、そして彼らに納税欲を呼び覚ますための一手段

解説）
1868年と1869年は軍備拡張競争一色であった。フランスにおいてもプロイセンにおいても同様に、悲観的な見方によって、高額な軍事予算が正当化された。ナポレオン3世とビスマルクが互いの肖像画を黒っぽい化け物のように描いている。「黒く描く」というのは「悲観的な見方をする」という意味である。『クラデラダッチュ』紙はまだビスマルクを「未来の英雄」とはみなしていないということになる。[19]

『クラデラダッチュ』紙がナポレオン3世ないしビスマルクに対して適用している「黒い幽霊」という表現は、人口に膾炙した「赤い幽霊」の転用である。「赤い幽霊」とは、1851年にパリで社会革命の危険を制圧するべくオーギュスト・ロミューによって発行されたパンフレットのタイトルである。このパンフレットは発行後ただちにドイツ語に翻訳されていた。[20]

この絵ではナポレオン3世に比べてビスマルクの方がずっと雄々しく描かれている。「三本の毛」は前にも触れたが、ショルツの発明である。中央背後には剣の山がそそり立っている。

図版17）1870年7月15日付『ベルリンのスズメバチ』第29号
（グスタフ・ハイル、木版）

タイトル）

2時間前

キャプション）

プロイセン：今ようやく、尊敬すべき隣国に欠けているものが何か分かった。フランスは長い間鼻血を出していない！

解説）

フランスにおいて、開戦直前に出たこの線描画は憤慨を招いた。[21]
一人のプロイセンの兵士が陽気に勝利を確信してラインの向こう岸を指している。そこでは声高にフランスの戦意が表明されている。パリのヴァンドーム記念柱、正確にはナポレオン1世の頭の上には―国民的シンボルとして―トキをつくるガリアの雄鶏が止まっている。病気がちのナポレオン3世―カエサルの姿で武装している―は玉座から立ち上がり、自分の松葉杖を突き戻している。彼は剣を鞘からぬいている。玉座の階段の左手にはフランスの国防大臣のエドモン・ルブフ元帥が―言うまでもなく彼の名の通り[去勢された]雄牛（Leboeuf＝le boeuf）として描かれており、右手には外交官の制服を着た外務大臣のド・グラモン公が見える。戦争へと駆り立てたのはこ

のグラモン公であった。

ライン河の岸に沿ってフランス国民の代表者が集まっている。すなわち攻撃意欲旺盛な兵士たち（一番左には頭の上にフーッとうなっている猫を載せたズワーブ兵[22]がおり、一番右には甲騎兵がいて、両者ともこぶしを握っている。甲騎兵の隣にも大声でわめく一人の兵士がいる）と、叫んでいる外交官らしき人間がいる。その後ろには報道関係者たちがいて、見分けが付くのは、政府新聞『コンスティテュシオネル』と、超ボナパルティズムで反プロイセンの機関紙『ペイ』のジャーナリストである。

真ん中にある「カウディウムのくびき caudinisches Joch」というのは、ローマ時代から知られた辱めの形態のひとつで、その際には低く身をかがめて敵の槍の間を通り抜けなければならなかった。これはビスマルクが細工して挑発した「エムスの電報」によるフランスへの「侮辱」を示唆していると思われる。

図版18）1870年8月21日付『クラデラダッチュ』第38/39号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）
一味全員
キャプション）
そしてこいつらは、「文明の先端を行進しつつ」、ドイツを水浸しにしようと目論んだ。

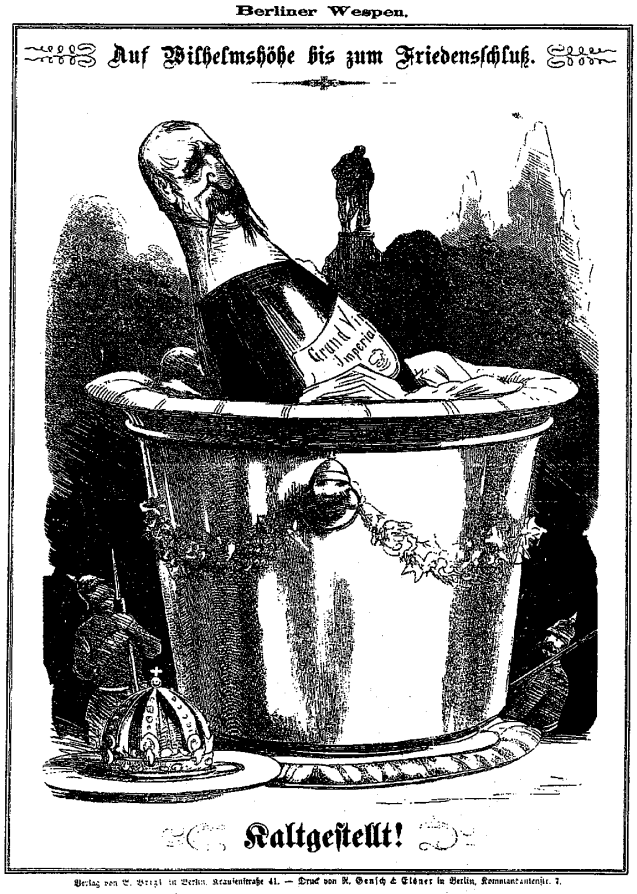
解説）
『クラデラダッチュ』紙は、同紙にとって厭わしいボナパルト主義のフランスの代表者たち全員、特に女性たちの群像を描いている。前面には皇室―ナポレオン3世、皇妃ウージェニー、皇太子「リュリュ」―、足元では猫が身構えている。その背後には、ピエール・ボナパルト（髭を生やしている）がいるが、この人物はこの年1月にあるジャーナリストを射殺しておきながら無罪放免になっている。それから「プロンプロン」、すなわち皇帝の従弟でありながら対抗して色々と陰謀をめぐらす上院議員ジェローム・ナポレオン、彼はナポレオン1世と似ていることで知られていた。皇妃の隣には従妹のマティルド・ボナパルトがいる。彼女は上流社会で重要な役割を果たしていた。左と右には、本物の高級娼婦がいる。

背後には左から右に向かって、シャルトルーズ酒を造っている修道士、敗北を勝利と発表している『ジュルナル・オフィシェル』の編集者[24]（持っている旗にザールブリュッケン、ヴァイセンベルク、ヴェルトでの勝利と書かれている）、その隣には仕事仲間で論争家のアドルフ・グラニエ・ド・カサニャックがいる。彼は煽動新聞『ペイ』を出していた。それからシャンパングラスを手に取りフリギア帽を被っている男がおり、後ろ右手には二人のアフリカ兵がいる。

これら全体を、1870年7月18日に第1回ヴァチカン公会議を通じて教皇の不謬性のドグマを決議させていた教皇の三重冠が見下ろしている。風になびく女性の下着の天辺にはボンネットとリボンが付いており、フランス国民の「柔弱さ」を強調している。

縁まで一杯に描きこんだこの線描画はドイツのカリカチュアの典型例である。ドイツのカリカチュアは、ずっと大判で生き生きとしたフランスのリトグラフ（ドーミエらの作品）とは区別される。元来リトグラフィーを発明したのはドイツ人のアーロイス・ゼーネフェルダー（1771－1834）であり、「1820年にはマドリードからペテルスブルクにいたるどの主要都市もリトグラフ工房を備えていた」[25]というのに、ドイツの新聞がリトグラフを使わず木版を採用したのは興味深いところである。

8　ナポレオン３世の没落



図版19）1870年９月16日付『ベルリンのスズメバチ』第38号
（グスタフ・ハイル、木版）

タイトル）
ヴィルヘルムスヘーエ城に続いて講和条約まで
キャプション）
勢力を挫かれて（「冷やされて」との掛け言葉）

解説）
1870年９月４日、ナポレオン３世は戦時捕虜となってヴィルヘルムスヘーエ城（カッセル近郊）に到着した。キャプションの「Kaltgestellt!」は、一方では、退位させられた皇帝が今となってはもう政治的役割を果たせないだろうということ、他方では、彼がシャンペンによって、捕虜の境遇を楽しんでいたことを意味している。

前景には盆の上にもう用済みになった帝冠が載っており、遠景には今日でもなお王宮の大庭園を見下ろしているヘラクレスの彫像が立っている。シャンペンクーラーの中の皇帝は、右からも左からもプロイセンの兵士によって見張られている。

この城はかつて（1807～1813）ナポレオン１世の一番末の弟ジェロームがヴェスト

ファーレンの王だったときの居城であった。その当時は、ヴィルヘルムスヘーエ城は一時的に「ナポレオンスヘーエ」城（「ヘーエ」は、「高地、丘」の意）と呼ばれていた。というわけでこの城は、ナポレオン家の捕虜に宿を提供する運命にあったということになる。

図版20）1871年６月25日付『クラデラダッチュ』第29/30号
（ヴィルヘルム・ショルツ、木版）

タイトル）

６月16日の入城式典の付録

キャプション）

確かに我々はフランス人が言うような野蛮人ではないが、上の絵のような光景を見られなかったことはやはり残念だ！どれほどか痛快だったろうに！

解説）

1871年６月16日に、勝利をおさめたドイツ軍がベルリンのブランデンブルク門を通って厳かに入城行進を行った。この絵では、普段は門の上で四頭の馬を操っているはずの女神ヴィクトリア像が、祝典の飾りに覆われた門柱の間を、敗者フランスの代表者

に凱旋車を引かせて通り抜けている。『クラデラダッチュ』紙は、古代ローマの伝統を利用している。ローマの伝統によれば、敗者は勝者の引き馬を務めねばならなかった。左から右にかけて、1870年7月にフランスの首相として「軽い気持ちで」[26] 戦争の宣言をしたエミール・オリヴィエ、それから退位させられた皇帝夫妻ナポレオン3世とウージェニー、最後に国防大臣エドモン・ルブフ元帥が描かれている。

かつて四頭立ての馬車（カドリガ）を引くヴィクトリア像が、ナポレオン1世に持ち去られたときの屈辱を晴らしたいというのが、（少なくとも）プロイセン人の一般的心情だったのであろう。

おわりに

ルイ＝ナポレオン治下、「新聞にたいする箝口令は、その厳しさにおいて七月王制の最悪の時期を凌いでいった。」[27] さすがのドーミエも呻吟したといわれる。今日、ナポレオン3世への歴史的評価は変わりつつあり、彼の功績もはっきりと記されるようになったが、[28] 言論と自由な表現を弾圧した罪は消えない。

ドーミエは元来屈した敵には寛大で、七月王制で失脚したルイ＝フィリップには2枚の穏やかなカリカチュアしか描いていないが、ルイ＝ナポレオンが捕虜となって失墜した暁には、辛辣の限りを尽くした1ダースもの作品を発表し、激しく罵倒した。[29] 例えば、作品の中で炎上する廃墟に「帝政とは平和なり」というナポレオン3世の発言を対比させたりなどしている。ルイ＝ナポレオンこそは1848年の革命を水泡に帰せしめたのみならず、フランスを戦争と敗北に巻き込んだからである。

今回はドイツの中でもベルリンの絵入り風刺新聞『クラデラダッチュ』を中心として、ルイ＝ナポレオンのカリカチュアを色々調べた。最初に述べたとおり、この新聞は彼を嘲弄し続けたと評されているが、ヴィルヘルム・ショルツの端整で品のある筆致のせいか、本稿に掲載しなかったものも含め、特に最初のうちは思ったほどひどく描かれていないという印象を持った。無論狐や狼にされている例があるし、プロイセンとフランスの間が険悪になっていくにつれ、太鼓腹で好意的でない描き方がされている。またドイツ中の風刺雑誌が彼の一挙一動を取り上げたということだから、本稿に取り上げた他紙の例のように、随分過激だったり下品だったりするものもあったわけだ。

外国の国家元首であるナポレオン1世と3世の肖像風刺画は、ドイツ中で氾濫した。[30] が、諸国民と大規模な戦争を行った1世の方がイギリスのギルレー（1757－1815）などから散々に描かれ（ナポレオンちび）、管見によればドイツにおいても辛辣そのものの作品が多い。ナポレオン1世時代の混乱に満ちたヨーロッパ情勢下での一枚ものの風刺画と、革命を経た後、また反動化した社会の新聞紙上で（潰されないよう警戒しながら）継続的にやっていかねばならない時代の風刺画とでは条件がやや異なり、

抑制度や表現法にも差があると思われる。

僅かな例からだが、19世紀後半の20年間を中心とするドイツとフランスとの関係を部分的に辿ることができ、特に、カリカチュアの中のナポレオン3世とビスマルクの応酬というような、人間化された形で歴史状況を把握していた当時の読者の心情が推し量られた。（了）

使用文献

Kladderadatsch digital(1848-1944):http://www.ub.uni-heidelberg.de/helios/digi/kladderadatsch.html
（ハイデルベルク大学がインターネット上ですべての号の紙面を提供している）

Juerg Albrecht : *Honoré Daumier*:Hamburg 1984.[＝Albrecht]
Otto Dann : *Nation und Nationalismus in Deutschland 1770-1990.* Dritte, überarbeitete und erweiterte Auflage. München 1996.（オットー・ダン、末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳『ドイツ国民とナショナリズム 1770－1990』名古屋大学出版会 1999年）
Raymond Escholier : *Daumier et son monde*, Paris 1965.（レイモン・エスコリエ、幸田礼雅訳『ドーミエとその世界』美術出版社 1980年）［＝Escholier］
Robert Justin Goldstein: *Political Censorship of the Arts and the Press in Nineteenth-Century Europe.* London 1989.（ロバート・ジャスティン・ゴールドスティーン、城戸朋子／村山圭一郎訳『政治的検閲－19世紀ヨーロッパにおける』法政大学出版局 2003年）［＝Goldstein］
Hrsg.von Ingrid Heinrich-Jost : *Kladderadatsch. Die Geschichte eines Berliner Witzblattes von 1848 bis ins Dritte Reich.* Köln 1982. ［＝Heinrich-Jost］
Hrsg.von Daniel Henri,Guillaume Le Quintrec und Peter Geiss : *Geschichte. Europa und die Welt vom Wiener Kongress bis 1945.* Stuttgart/Leipzig 2008.
鹿島茂『怪帝ナポレオンⅢ世－第二帝政全史』講談社 2004年［＝鹿島］
Ursula E.Koch : *Der Teufel in Berlin. Von der Märzrevolution bis zu Bismarcks Entlassung. Illustrierte politische Witzblätter einer Metropole 1848-1890.* Köln 1991. ［＝Koch］
Georg Piltz : *Geschichte der europäischen Karikatur.* Berlin 1976. ［＝Piltz］

注

1）日本でもいくつもの美術館でドーミエ展が開催されている。例えば、福島県立美術館（2008年2月16日－3月23日）、町田市立国際版画美術館（4月9日－6月22日）、伊丹市立美術館（第一部：8月30日－11月24日。第二部：11月29日－12月21日）。フランス本国のドーミエ研究の第一人者を招いての講演会なども東京を中心として何度も実施された。
2）Albrecht, S.25 ff.
3）「九月法」第18条には「その種類と大きさとにかかわらず、いかなるデッサン、銅版画、リトグラフ、メダルないしエッチング、寓意画であれ、事前にパリの内務省、ないし諸県においては知事の許可を得ずして、これを公表、掲示ないし販売に供してはならない云々・・・」とある。Albrecht, S.40 f.
4）Heinrich-Jost, S.9.
5）Goldtein、邦訳132頁。「九月法」は結局1881年まで続いた。また鹿島、142-143頁。
6）オーストリアやイタリアでもドイツと同様の経過を辿り、オーストリアでは1848年の風刺雑誌はすべて直ちに潰されるか、発禁になり、イタリアでもピエモントを除いて、各地の政治風刺雑誌が犠牲になった。Goldtein、邦訳130－131頁。
7）Piltz, S.190.
8）鹿島、75頁。

9）Koch, S.419.
10）Koch, S.420.
11）Koch, S.433.
12）Koch, S.439.
13）注目すべきことに、ショルツは予見能力を持っていたかのように、後に実際に建立された有名なビスマルク像とそっくりのものを描いている。Heinrich-Jost,S.90.
14）Koch, S.450.
15）Koch, S.463.
16）1866年6月15日－8月23日（プラハ条約）。7月3日にはケーニヒグレーツの戦いでオーストリアは大敗し、戦争の決着はほぼついていた。
17）Koch, S.469.
18）Piltz, S.190.
19）Heinrich-Jost, S.91.
20）Koch, S.478.
21）Koch, S.483.
22）1830年ごろ仏領アルジェリアで編制された、主として北アフリカのベルベル種族からなる歩兵部隊の隊員。
23）鹿島、430－432頁。ルイ＝ナポレオンの従弟だが、ボナパルト一族の鼻つまみ者だった。
24）Koch, S.487.
25）Albrecht, S.12.
26）鹿島、438頁。
27）Escholier、邦訳163頁。
28）鹿島茂の『怪帝ナポレオンⅢ世』では、最近の学説を多数援用して彼の功績を強調している。特に466頁。
29）Albrecht, S.95.
30）Piltz, S.34.

使用図版

図版1）、5）、18）はHrsg.von Ingrid Heinrich-Jost: *Kladderadatsch. Die Geschichte eines Berliner Witzblattes von 1848 bis ins Dritte Reich.* Köln 1982.から、残りはUrsula E.Koch: *Der Teufel in Berlin. Von der Märzrevolution bis zu Bismarcks Entlassung. Illustrierte politische Witzblätter einer Metropole 1848-1890.* Köln 1991.より転載した。